2015.5.16

大通街宣

1. こんばんは、岩本です。「見果てぬ夢」という言葉があります。実現不可能なことのたとえです。たとえば、不老不死もその 1 つでしょう。夢が夢のままで終わればいいのですが、私たち人間は、見果てぬ夢を何とか実現しようと無理をします。しかし、それは、時に「悪夢」に変わります。自由に空を飛ぶことのできる翼を持ったイカロスが、太陽に近づこうとして墜落したように。あるいは、「夢の高速増殖炉」と謳われた「もんじゅ」が、何 10 年、何 100 年、それ以上の年月、人類と環境に災厄をもたらし続ける「ガラクタ」になり果てたように。
2. 人間にとってのもう 1 つの見果てぬ夢は、犯罪が起こる前に犯罪を阻止することではないでしょうか。殺人が起こった後で、その犯人を逮捕し、裁判にかけて、償いをさせたとしても、殺された被害者は、生き返るわけではありません。犯人に重い刑罰が科されたとしても、遺族にはどれほどの慰めになるでしょうか。だから、殺人を未然に防ぎたい。こう考えるのは自然なことです。
3. SF の巨匠フィリップ・K・ディックに「マイノリティ・レポート」という傑作短編があります。スピルバーグによって映画化もされました。この作品では、3 人の予知能力者が未来を見通し、犯罪を犯すと予知された者は、次々に強制収容所に送られていきます。このシステムによって、犯罪ゼロが実現します。しかし、現実の世界には予知能力者など存在しません。犯罪の予防は、ごく普通の人間が行うことになります。
4. 犯罪の予防を求められた捜査官は、どうするでしょう。まず、すべての人間を疑うことから始めるはずです。そして、いまだ犯罪とはいえないような小さな犯罪の「芽」を発見して、これを未然に摘もうとするでしょう。実際に犯罪が起きたならば、その「芽」を見逃したとして非難されるのは自分です。誰もが保身に走ります。結果的に、すべての人間が、監視の網の目に捕らえられてしまうことになるでしょう。
5. そんな社会はユートピアだろうか。ある学生がこう言いました。そんな社会は嫌だ。「人を見たら泥棒と思え」、「疑わしきは罰せよ」。こんなことを原則とする社会に、僕は決して住みたくない。こうも言いました。人間には、どんなに頭にきたことがあっても、犯罪を犯す前に思いとどまる理性がある。人間は変わる。僕は、人間の理性を信じたい。期せずして、学生の間から拍手が起こりました。彼らのように若者が日本にいる限り、まだまだ希望はあります。
6. 確かに、人間は、絶望的に愚かかもしれません。しかし、学生が言うように、人間の理性への信頼がなければ、自由も民主主義も成り立ちません。すべての人間を疑わなければ可能とならない「共謀罪」という仕組みは、人間不信を社会に蔓延させ、自由と民主主義の土台を蝕んでいきます。自由と民主主義を第 1 の価値とする日本国憲法

は、共謀罪の考え方と相容れません。私たちには、未来の子供たちに自由と民主主義のバトンを手渡す責任があります。人権を守り抜くことは、私たちの責務なのです。厳しい戦いが続きます。ともに頑張りましょう。本日はありがとうございました。